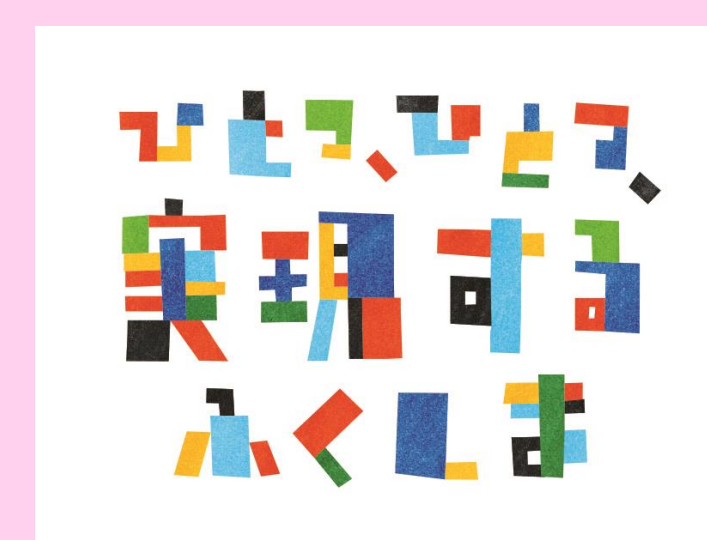
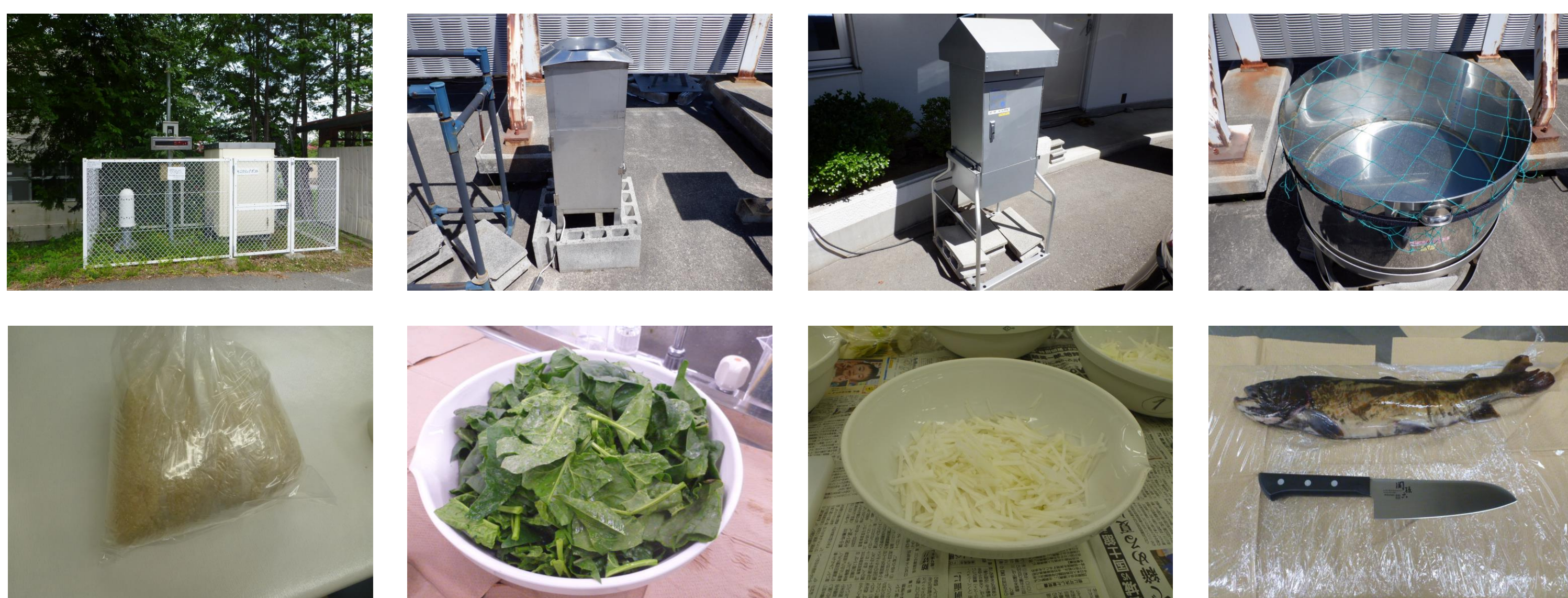




環境創造センター福島支所における分析のうち、原子力規制庁がとりまとめている環境放射能水準調査に係る分析がある。震災に伴う原発事故後における福島県の定時降水調査について、調査内容の紹介及びこれまでの結果についてとりまとめた。

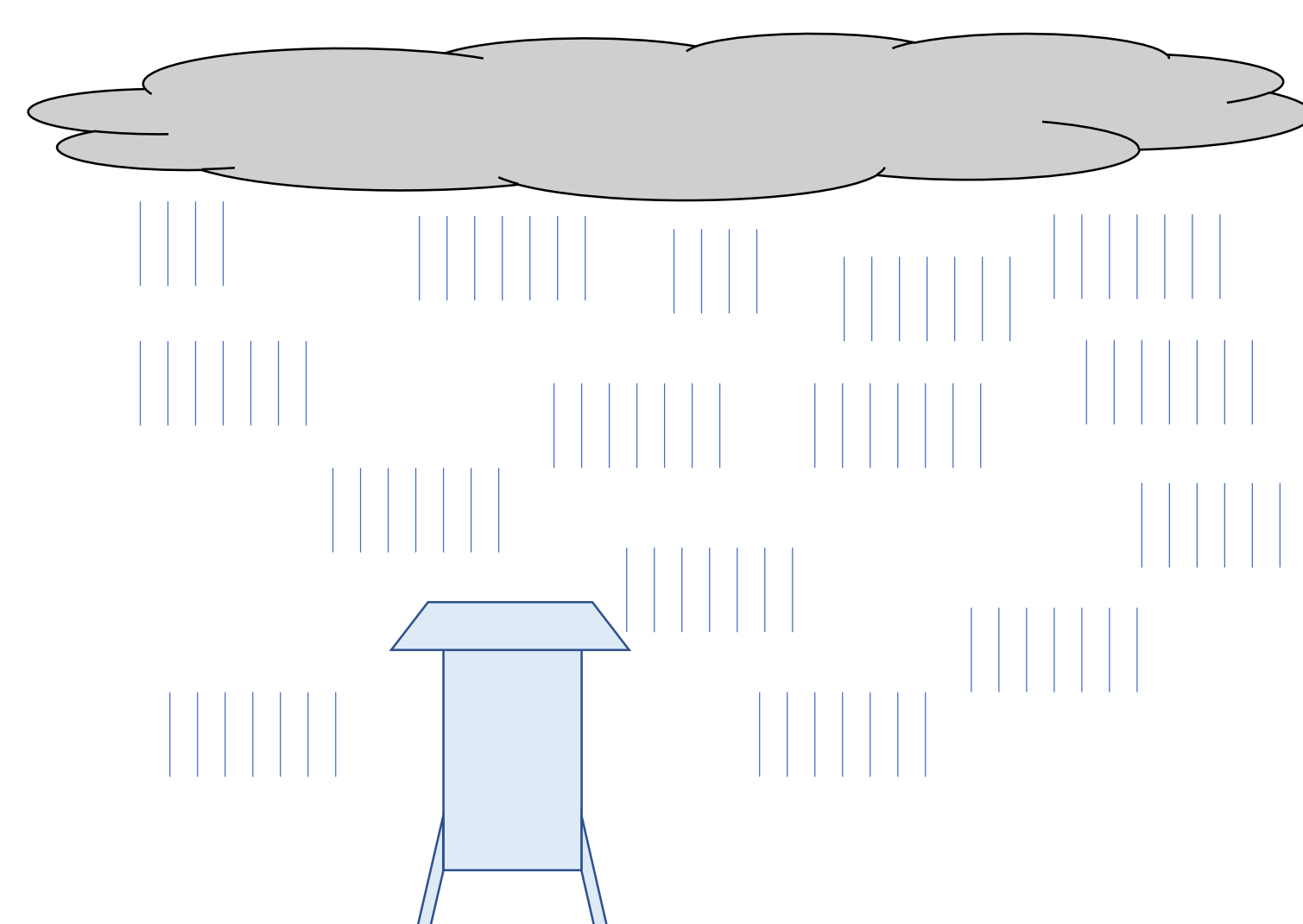
水準調査とは

全国における原子力施設等からの影響の有無を把握することを目的として、全国47都道府県の環境放射能を調査しているもの。調査対象として、空間線量率、定時降水、大気浮遊じん、降下物、陸水（上水、淡水）、土壌、精米、野菜類（ほうれん草、大根）、茶、牛乳、水産生物、海水、海底土がある。2023年度は福島県において茶及び牛乳は対象外である。



定時降水

定時降水とは、口の開いた採取容器を常時設置しておき、降水のある都度、雨水などの容器に入ったものを回収し、放射能濃度を調査するものである。事故直後はセシウム137等が検出される頻度が高かったが、2023年度における検出数は年間で3回であった。



福島県における定時降水結果について

当県における定時降水について、調査方法が同一である2014年度以降の結果を図1に示す。

試料には雨水以外にも砂や塵が混ざることがあるが、それらも併せて測定試料となる。よって、事故により土壌に沈着した放射性セシウム等の影響が想定されることから、当県では参考として試料中にどの程度の砂や塵などの固形物が含まれているか、写真により記録をしている。その結果、Cs-137が検出された試料には視認できる固形物が含まれていた。

このことから、雨水そのものに限らず、風等により採取容器に入り込んだ固形物に沈着した放射性物質が測定結果に与える影響が大きいものと推察される。

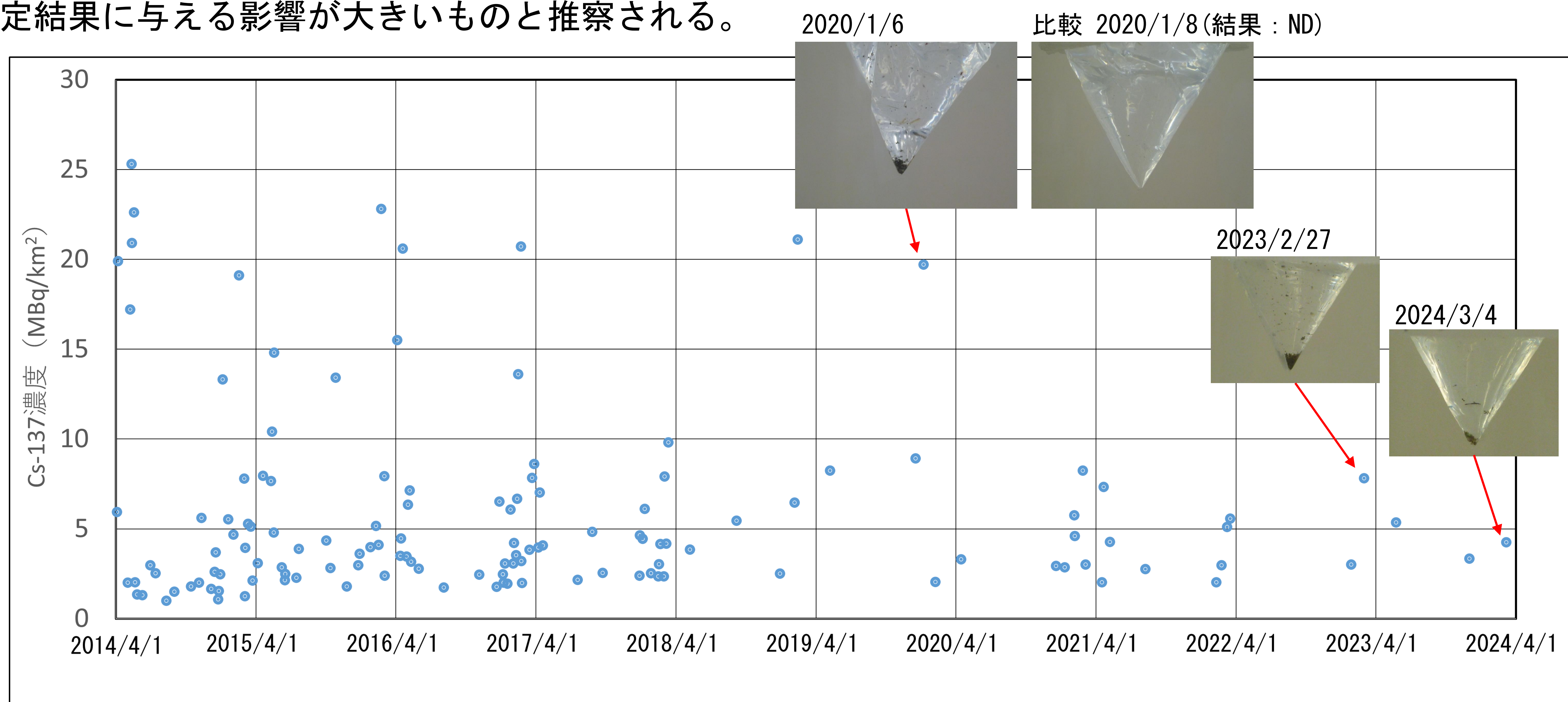


図1 定時降水調査におけるCs-137濃度の推移